日本医師会医学賞を受賞して

自治医科大学公衆衛生学教室　中村好一（福岡 5 期）

このたび、日本医師会医学賞を頂き、11 月 1 日の授賞式に参加してきました。佐賀大学の嬉野博志先生（佐賀 29 期）も医学研究奨励賞を受賞され、彼も「同窓会報の原稿を依頼された」と言って掲載用の写真を 2 人で並んで撮りましたので、当日の写真はそちらをご覧下さい。

受賞のタイトルは「難病の疫学研究」。歴代の受賞者の受賞タイトルと比較すると、単純でわかりやすい反面、「結局、何をやったの？」というような代物です。もう四半世紀になるプリオン病の疫学と、自治医大卒業以来取り組んできた川崎病の疫学で「合わせて 1 本」といったところでしょうか。一方は少し変わった感染症、一方はいまだに原因不明ですが感染症の関与が強く疑われる疾患(感染症関係の雑誌でも論文が掲載されています)で、「もしかしたら自分は感染症の疫学の専門家かしら？」とも思っています。ただ、これまで取り組んできた研究テーマは多岐にわたり、「総合医」ならぬ「総合疫学者」かも。どのようなことをやってきたかは、今年刊行した「疫学とはなにか」（技術評論社）をご覧下さい（といって、自著の宣伝をさりげなく行う）。

何故、このような賞を受賞することができたか。答えは簡単で、「人がやれないことをやったから」です。ただし、「人がやれない」というのは能力の話ではなく、環境の話。プリオン病は罹患率が人口 100 万人あたり年間 1 というのが定説です。しかし、わが国で

はこの倍程度発生していますが、これについては「きちんとした疫学的な観察を行えば、この程度はいるのだろう」と国際的な会議でも主張し、誰も異論を唱えません。それでも年間 300 人程度です。川崎病はもっと多く、年間 1 万 5 千人程度ですが、昨年は新型コロナウイルスの影響で前年の 3 分の 2 に減りました（詳しくは報告書参照 https://www.jichi.ac.jp/dph/inprogress/kawasaki/）。いずれの疾患も比較的稀な疾患で、この程度の患者数であれば他の疫学者の参入の余地はありません。「隙間産業」ならぬ「隙間疫学」をやっているので、それなりの評価を頂いています。

研究の成果公表は学術論文です。それぞれの研究で論文の、特に校正にまつわる話を 1 つずつ披露します。プリオン病に関する記述疫学研究の論文「Descriptive epidemiology of prion disease in Japan: 1999-2012. J Epidemiol 2015;25:8-14 doi:10.2188/jea.JE20140022」ですが、そもそも論文の記載形式としておかしいでしょう。実はこの論文、著者の名前、しかも筆頭著者である自分の名前が間違っているのです。教室の助教の小佐見光樹先生（兵庫 32 期）が自分の論文を書いているときに、[PubMed で先生の論文が出てこないんです」というところから発覚しました。校正をいい加減にやった（まさかこんなところで間違うはずはない、という思い込み）天罰でしょう。「校正恐るべし」、「研究者生活長ければ恥多し」。

川崎病に関する論文は、患者追跡研究に関する 1992 年の New Engl J Med の論文でしょう（Nakamura Y, et al. Mortality among children with Kawasaki disease in Japan. New Engl J Med 1992;326:1246-9 doi:10.1056/NEJM199205073261903）。米国留学前に日本で解析を行い、データを留学先（テキサス州ヒューストンのテキサス大学公衆衛生学部）に持っ

て行って論文化し、ダメ元で投稿したら当たりました。問題は掲載決定後の校正。「電話で修正部分を知らせるように」とのことでしたが、英語力の自信がないので、同級生にお願いして代わりに電話してもらいました。中村⇔同級生⇔編集担当のやりとり（⇔部分はもちろん英語です）で小一時間要しました。私が直接やっていたら、と考えると、同級生にお願いして良かったなぁ、と今でも思っています。掲載誌（1992 年 5 月 7 日号）は発売日に大学内のショップで購入しました（表紙に値段「＄3.50」がスタンプされています。結構安かったね）。いまでも教授室の本棚の一番高いところに家宝として置いています。しかしこの日以降、私の人生は一方的な長期低落傾向が 30 年間に渡って続いているのも事実です。

受賞講演は日本医師会の会員向けサイトで公開されていますが、牧野伸子教授（大阪 10 期）の尽力で教室のサイトでも公開しています。30 分ちょいですので、興味がある方はご覧下さい。

自治医大を卒業してから来年で 40 年、不祥事で懲戒免職にならない限り再来年 3 月に同級生に 41 年遅れて自治医大を本当に卒業します。ただ、無事に定年退職すれば「名誉教授」になる（はず）なので、高校卒業以来死ぬまで自治医大と関係していることになるのでしょう（こんなことは全く予想はしていませんでしたが）。残りの時間、卒業生のためになにかできることがあれば良いな、と考える今日この頃です。

最後になりましたが、最近、カチッとした日本語の文章が書けなくなりました。昨年改定した「基礎から学ぶ楽しい疫学　第 4 版」、今年改定した「基礎から学ぶ楽しい学会発表・論文執筆　第 2 版」（いずれも医学書院、またさりげなく［堂々と？］自著を宣伝し

ている）はいずれもこのような語り口になっています。困ったものですね。